



美子集

新潮日本文学

22

新潮社



© Ryokubin Hayashi, Printed in Japan 1971

口絵写真撮影 林 忠彦

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

定価 1600円

林 芙美子集 新潮日本文学22

昭和四十六年 九月十二日 発行
昭和五十三年 六月二十日 八刷

著 者 林 芙美子

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部・東京(03)二六六一五一二

編集部・東京(03)二六六一五四二一

振替 東京 四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製 本 新宿加藤製本

本文用紙 三菱製紙株式会社

扉・見返・カバー用紙 特種製紙株式

会社 表紙クロス 日本クロス

工業株式会社 雨用紙 日清紡績

株式会社 製函 文京紙器株式会社

目次

河	牡	泣	清	風	浮	稻	放
沙		虫	貧	琴と魚の町	*		浪
魚	蠣	小僧	の書		雲	妻	記

476	455	416	397	382	172	87	5
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	---

下 骨 晚

年 解

譜 說

町 菊

和
田
芳
恵

534 522 512 500 487

林
芙
美
子
集

放浪記

放浪記以前

私は北九州の或る小学校で、こんな歌を習った事があった。

更けゆく秋の夜 旅の空の
 佗しき思いに 一人なやむ
 恋いしや古里 なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。父は四国の伊予の人間で、太物の行商人であつた。母は、九州の桜島の温泉宿の娘である。母は他国者と一緒になつたと云うので、鹿児島を追放されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口県の下関と云う処であつた。私が生れたのはその下関の町である。——故郷に入れられなかつた両親

を持つ私は、したがって旅が古里であつた。それ故、宿命的に旅人である私は、この恋いしや古里の歌を、随分佗しい氣持で習つたものであつた。——八つの時、私の幼い人生にも、暴風が吹きつけてきたのだ。若松で、呉服物の鞆売りをして、かなりの財産をつくつていた父は、長崎の沖の天草から逃げて来た浜と云う芸者を家に入れていた。雪の降る旧正月を最後として、私の母は、八つの私を連れて父の家を出てしまつたのだ。若松と云うところは、渡し船に乗らなければ行けないところだと覺えている。

今の私の父は養父である。このひとは岡山の人間で、実直過ぎるほどの小心さと、アブノーマルな山ッ氣とで、人生の半分は苦勞で埋もれていた人だ。私は母の連れ子になつて、この父と一緒になると、ほとんど住家と云うものを持つたないで暮して来た。どこへ行つても木賃宿ばかりの生活だつた。「お父つあんは、家を好かんと言ふ、道具が好かんと言ふ……」母は私にいつもこんなことを云つていた。そこで、人生いたるところ木賃宿ばかりの思い出を持って、私は美しい山河も知らないで、養父と母に連れられて、九州一円を転々と行商をしてまわつていたのである。私がはじめて小学校へはいつたのは長崎であつた。ざつこく屋と云う木賃宿から、その頃流行のモスリシンの改良服と云うのをきせられて、南京町近くの小学校へ通つて行つた。それを振り出しにして、佐世保、久留米、下関、門司、戸畑、折尾と言つた順に、四年の間に、七度も学校をかわつて、

私には親しい友達が一人も出来なかった。

「お父つあん、俺アもう、学校さ行きとらなかい……」

せつばつまった思いで、私は小学校をやめてしまったのだ。私は学校へ行くのが厭になつていたのだ。それは丁度、直方^{なかな}の炭坑町に住んでいた私の十二の時であつたらう。

「ふうちゃんにも、何か売らせましようたいなあ……」遊ばせてはモッタイナイ年頃であつた。私は学校をやめて行商をするようになったのだ。

○

直方の町は明けても暮れても煤^{すす}けて暗い空であつた。砂で漉した鉄分の多い水で舌がよれるような町であつた。大正町の馬屋と云う木賃宿に落ちついたのが七月で、父達は相変らず、私を宿に置きっぱなしにすると、荷車を借りて、メリヤス類、足袋、新モス、腹巻、そういつた物を行李^{こしり}に入れて、母が後押しで炭坑や陶器製造所へ行商に行つていた。私には初めての見知らぬ土地であつた。私は三銭の小遣を貰い、それを兵児帯^{へいぎ}に巻いて、毎日町に遊びに出ていた。門司のように活気のある街でもない。長崎のように美しい街でもない。佐世保のように女のひとが美しい町でもなかった。骸炭^{がいたん}のザクザクした道をはさんで、煤けた軒が不透明なあくびをしているような町だつた。駄菓子屋、うどんや、屑屋、貸蒲団屋、まるで荷物列車のような町だ。その店先には、町を歩いている女とは正反對の、これは又不健

康な女達が、尖^{とが}つた目をして歩いていた。七月の暑い陽ざしの下を通る女は、汚れた腰巻と、袖のない襦袢^{じゆばん}きりである。夕方になると、シャベルを持った女や、空のモッコをぶらさげた女の群れが、三々五々しゃべくりながら長屋へ帰つて行つた。

流行歌のおいといこそうだよの唄が流行^{はやり}つていた。

私の三銭の小遣は双児美人の豆本とか、氷饅頭^{こりまんじゅう}のようなもので消えていた。——間もなく私は小学校へ行くかわりに、須崎町の栗^栗おこし工場に、日給二十三銭で通つた。その頃、箒をさげて買いに行つていた米が、たしか十八銭だつたと覚えてゐる。夜は近所の貸本屋から、腕の喜三郎や横紙破りの福島正則、不如婦、なさぬ仲、渦巻などを借りて読んだ。そうした物語の中から何を教わつたのだろうか？ メデタシ、メデタシの好きな、虫のいい空想と、ヒロイズムとセンチメンタリズムが、海綿のような私の頭をひたしてしまつた。私の周囲は朝から晩まで金の話である。私の唯一の理想は、女成金になりたいと云う事だつた。雨が何日も降り続いて、父の借りた荷車が雨にさらされると、朝も晩も、かぼちゃ飯で、茶碗を持つのがほんとに淋しかった。

○

この木賃宿には、通称シンケイ（神経）と呼んでいる、

坑夫上りの狂人が居て、このひとはダイナマイトで飛ばされて馬鹿になつた人だと宿の人が云つていた。毎朝早く、町の女達と一緒にトロッコを押して出かけて行く気立の優しい狂人である。私はこのシンケイによく虱を取つてもらつたものだ。彼は後で支柱夫に出世したけれど、外に、島根の方から流れて来ている祭文語りの義眼の男や、夫婦者の坑夫が二組、まむし酒を売るテキヤ、親指のない淫売婦、サーカスよりも面白い集団であつた。

「トロッコで圧されて指を取つた云いよるけれど、嘘ばんな、誰ぞに切られたとじゃろ……」

馬屋のお上さんは、片眼で笑いながら母にこう云つていたものだ。或る日、この指のない淫売婦と私は風呂に行つた。ドロドロの苔むした暗い風呂場だつた。この女は、腹をぐるりと一巻きにして、臍のところに朱い舌を出した蛇の文身をしていた。私は九州で初めてこんな凄女を見た。私は子供だつたから、しみじみ正視してこの薄青いこわい蛇の文身を見ていたものだ。

木賃宿に泊っている夫婦者は、たいてい自炊で、自炊でない者達も、米を買つて来て炊いてもらつていた。

ぼろろくのように焼けた暑い直方の町角に、そのころカチュウシャの絵看板が立つようになつた。異人娘が、頭から毛布をかぶつて、雪の降っている停車場で、汽車の窓を叩いている図である。すると問もなく、頭の真ん中を二つに分けたカチュウシャの髪が流行つて来た。

カチュウシャ可愛いや 別れの辛さ
せめて淡雪 とけぬ間に
神に願いを ララかけましようか。

なつかしい唄である。この炭坑街にまたたく間に、このカチュウシャの唄は流行してしまつた。ロシヤ女の純情な恋愛はよくわからなかつたけれど、それでも、私は映画を見て来ると、非常にロマンチックな少女になつてしまつたのだ。浮かれ節（浪花節）より他に芝居小屋に連れて行つてもらえなかつた私が、たつた一人で隠れてカチュウシャの映画を毎日見に行つたものであつた。当分は、カチュウシャで夢見心地であつた。石油を買いに行く道の、白い來竹桃の咲く広場で、町の子供達とカチュウシャごっこや、炭坑ごっこをして遊んだりもした。炭坑ごつこの遊びは、女の子はトロッコを押す真似をしたり、男の子は炭坑節を唄いながら土をほじくつて行くしぐさである。

○

そのころの私はとても元気な子供だつた。

一カ月ばかり勤めていた栗おこし工場の二十三銭也にもさよならをすると、私は父が仕入れて来た、扇子や化粧品を鼠色の風呂敷に背負つて、遠賀川を渡り陸道を越して、炭坑の社宅や坑夫小屋に行商して歩くようになった。炭坑

には、色々な行商人が這入り込んでゐるのだ。

「暑うしてたまらんなア」この頃私には、こうして親しく言葉かける相棒が二人ばかりあった。「松ちゃん」これは香月から歩いて来る駄菓子屋で、可愛い十五の少女であったが、間もなく、青島へ芸者に売られて行つてしまつた。「ひろちゃん」干物屋の売り子で、十二の少年だけれど、彼の理想は、一人前の坑夫になりたい事だった。酒が呑めて、ツルハシを一寸高く振りかざせば人が驚くし、町の連鎖劇は無料でみられるし、月の出た遠賀川のほとりを、私はこのひろちゃんたちの話を聞きながら帰つたものだった。——その頃よく均一と云う言葉が流行つていたけれど、私の扇子も均一の十銭で、鯉の絵や、七福神、富士山の絵が描いてある。骨はがんにような竹が七本ばかりついている。毎日平均二十本位はかたづけていった。緑色のペンキのはげた杜宅の細君よりも、坑夫長屋をまわつた方がはるかに扇子はさばっていった。外にラッパ長屋と云つて、一棟に十家族も住んでゐる鮮人長屋もあった。アンペラの畳の上には玉葱をむいたような子供達が、裸で重なりあつて遊んでいた。

烈々とした空の下には、掘りかえした土が口を開けて、雷のように遠くではトロッコの流れる音が聞えている。昼食時になると、蟻の塔のように材木を組みわたした暗い坑道口から、泡のように湧いて出る坑夫達を待つて、幼い私はあっちこち扇子を売りに歩いた。坑夫達の汗は水では

なくて、もう黒い飴のようであつた。今、自分達が掘りかえした石炭土の上にゴロリと横になると、バクバクまるで金魚のように空気を吸つてよく眠つた。まるでゴリラの群れのようにだつた。

そうしてこの静かな景色の中に動いているものと云えば、棟を流れて行く昔風なモッコである。屋食が終るとあちからもこちからもカチュウシャの唄が流れて来ている。

やがて夕顔の花のようなカンテラの灯が、薄い光で地を這つて行くと、けたたましい警笛の音だ。国を出るときや玉の肌……何でもない唄声ではあるけれど、もうもうとした石炭土の山を見ていると何だか子供心にも切ないものがあった。

扇子が売れなくなると、私は一つ一銭のアンパンを売り歩くようになった。炭坑まで小一里の道程を、よく休み休み私はアンパンをつまみ食ひして行つたものだ。父はその頃、商売上の事から坑夫と喧嘩をして頭をグルグル手拭で巻いて宿にくすぶつていた。母は多賀神社のそばでバナナの露店を開いていた。無数に駅からなだれて来る者は、坑夫の群れである。一山いくらのバナナは割によく売れて行つた。アンパンを売りさばいて母のそばへ籠を置くと、私はよく多賀神社へ遊びに行つた。そして大勢の女や男達と一緒に、私も馬の銅像に祈願をこめた。いい事がありますように。——多賀さんの祭りには、きまつて雨が降る。多

くの露店商人達は、駅のみさしや、多賀さんの境内を行ったり来たりして雨空を見上げていたものだった。

十月になって、炭坑にストライキがあった。街中は、ジョンと鼻をつまんだように静かになると、炭坑から来る坑夫達だけが殺気だつて活気があった。ストライキ、さりとはい辛いね。私はこんな頃も覚えた。炭坑のストライキは、始終の事で坑夫達はさつさと他の炭坑へ流れて行くのだそう。そのたびに、町の商人との取引は抹殺されてしまうので、めつたに坑夫達には品物を貸して帰れなかった。それでも坑夫相手の商売は、てつと早くて、ユカイだと商人達は云っていた。

○

「あんたも、四十過ぎとんなはつとじゃけん、少しは身を入れてくれんな、仕様がなかもんなた……」

私は豆ランプの灯のかげで、一生懸命探偵小説のジゴマを読んでいた。裾にさしあって寝ている母が父に何時もこつぶやいていた。外はながい雨である。

「一軒、家ちゆうもんを、定めんとあんた、こぎゃん時に困るけんな」

「ほんにヤカマシかな」

父が小声で呟鳴ると、あとは又雨の音だった。——そのころ、指の無い淫売婦だけは、いつも元気で酒を呑んでい

た。

「戦争でも始まるとよかな」

この淫売婦の持論はいつも戦争の話だった。この世の金が、ひっくりかえるようになるといいと云った。炭坑にうんと金が流れて来るといいと云っていた。「あんたは、ほんまによか生れつきな」母にこう云われると、指の無い淫売婦は、

「小母つさんまで、そぎゃん思うとんなはると……」彼女は窓から何か投げては淋しそうに笑っていた。二十五だと云っていたが、労働者上りらしいプチプチした若さを持っていた。

十一月の声のかかる時であった。

黒崎からの帰り道、父と母と私は、大声で話しながら、軽い荷車を引いて、暗い遠賀川の堤防を歩いていた。

「お母さんも、お前も車へ乗れや、まだまだ遠いけに、歩くのはしんどいぞ……」

母と私は、荷車の上に乗つたかると、父は元気のいい声で唄いながら私達を引いて歩いた。

秋になると、星が幾つも流れて行く。もうじき街の入口である。後ろの方から、「おっさんよっ」と呼ぶ声がした。渡り歩きのかたが呼んでゐるらしかった。父は荷車を止めて「何ぞー」と呼応した。二人の坑夫が這いながらついて来た。二日も食わないのだと云う。逃げて来たのかと父が

聞いていた。二人共鮮人であった。折尾まで行くのだから、金を貸してくれと何度も頭をさげた。父は沈黙^{ちんもく}して五十銭銀貨を二枚出すと、一人ずつに握らせてやった。堤の上を冷たい風が吹いて行く。茫々とした二人の鮮人の頭の上に星が光っていて、妙にガクガク私たちは慄^{おそ}えていたが、二人共一匹もらうと、私達の車の後を押して長い事沈黙^{ちんもく}して町までついて来た。

しばらくして父は祖父が死んだので、岡山へ田地を売りに帰って行った。少し資本をこしらえて来て、唐津物を糶^{せう}売^りをしてみたい、これが唯一の目的であった。何によらず炭坑街で、てつとり早く売れるものは、食物である。母のバナナと、私のアンパンは、雨が降りさえしなければ、二人の食べる位は売れて行った。馬屋の払い月二四二十銭で、今は母も家を一軒借りるよりこの方が楽だと云っていた。だが、どこまで行ってもみじめすぎる私達である。秋になると、神経痛で、母は何日も商売を休むし、父は田地を売ってたった四十円のお金しか持って来なかった。父はその金で、唐津焼を仕入れると、佐世保へ一人で働きに行ってしまった。

「じき二人は呼ぶけんのう……」

こう云って、父は陽に焼けた厚司^{うし}一枚で汽車に乗って行った。私は一日も休めないアンパンの行商である。雨が降ると、直方の街中を軒並にアンパンを売って歩いた。

このころの思い出は一生忘れることは出来ないのだ。私には、商売は一寸も苦痛ではなかった。一軒一軒歩いて行く、五銭、二銭、三銭と云う風に、私のこしらえた財布には金がたまっている。そして私は、自分がどんなに商売上手であるかを母に賞めてもらうのが楽しみであった。私は二カ月もアンパンを売って母と暮した。或る日、街から帰ると、美しいヒワ色の兵児帯^{へいぎ}を母が縫っていた。

「どきちゃんしたと？」

私は驚異の眼をみはったものだ。四国のお父さんから送って来たのだと母は云っていた。私はなぜか胸が鳴っていた。間もなく、呼びに帰って来た義父と一緒に、私達三人は、直方を引きあげて、折尾行の汽車に乗った。毎日あの道を歩いたのだ。汽車が遠賀川の鉄橋を越すと、堤にそった白い路が暮れそめていて、私の目に悲しくうつるのであった。白帆が一ツ川上へ登っている、なつかしい景色である、汽車の中では、金鎖や、指輪や、風船、絵本などを売る商人が、長い事しゃべっていた。父は赤い硝子玉^{がらすたまご}のといった指輪を私に買ってくれたりした。

(十二月×日)

さいはての駅に下り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

雪が降っている。私はこの啄木の歌を偶々と思い浮べながら、郷愁のようなものを感じていた。便所の窓を明けると、夕方の門燈が薄明るくついでいて、むかし信州の山で見たしやくなげの紅い花のようで、とても美しかった。

「婢やアお嬢ちゃんおんぶしておくれッー」

奥さんの声がしている。

あああの百台子と云う子供は私には苦手だ。よく泣くし、先生に似ていて、神経が細くて全く火の玉を背負っているような感じである。——せめてこうして便所にはいつている時だけが、私の体のような気がする。

(バナナに鰻、豚カツに蜜柑、思いきりこんなものが食べてみたいなア)

気持が貧しくなってくると、私は妙に落書きをしたくなってくる。豚カツにバナナ私は指で壁に書いてみた。

夕飯の支度の出来るまで赤ん坊をおぶって廊下を何度も行ったり来たりしている。秋江氏の家へ来て、今日で一週間あまただけだ、先の目標もなさそうである。この先生は、日に幾度も梯子段を上ったり降ったりしている。まるで廿日鼠のようだ。あの神経には全くやりきれない。

「チャンチンコイチャン！ よく眠ったかい！」

私の肩を覗いては、先生は安心をしたようにじんじんばいよいをして二階へ上って行く。

私は廊下の本箱から、今日はチェホフを引っ張り出して読んだ。チェホフは心の古里だ。チェホフの吐息は、姿はみな生きて、黄昏の私の心に、何かブツブツものを言いかけて来る。柔らかな本の手ざわり、この先生の小説を読んでいると、もう一度チェホフを読んでもいいのと思った。京都のお女郎の話なんか、私には縁遠い世界だ。

夜。

家政婦のお菊さんが、台所で美味しそうな五目寿司を拵えているのを見てとても嬉しくなった。

赤ん坊を風呂に入れて、ひとしずまりすると、もう十一時である。私は赤ん坊と云うものが大嫌いなだけけれど、不思議な事に、赤ん坊は私の背中におぶさると、すぐウトウトと眠ってしまつて、家の人達が珍しがっている。

お蔭で本が読めること——。年を取って子供が出来ること、仕事も手につかない程心配になるのかも知れない。反感がおきる程、先生が赤ん坊にハラハラしているのを見ると、女中なんて一生するものではないと思つた。

うまごやしにだつて、可憐な白い花が咲くつて事を、先生は知らないのかしら……。奥さんは野そだちな人だけれど、眠つたようなひとで、この家では私は一番好きなひとである。

(十二月×日)

ひまが出るなり。

別に行くところもない。大きな風呂敷包みを持って、汽車道の上に架った陸橋の上で、貰った紙包みを開いて見たら、たった二円はいつていた。二週間あまりも居て、金二円也。足の先から、冷たい血があがるような思いだった。

——ブラブラ大きな風呂敷包みをさげて歩いてみると、何だかザラザラした気持で、何もかも投げ出したくなってきた。通りすがりに着いた瓦葺きの文化住宅の貸家があったので這入ってみる。庭が広くて、ガラス窓が十二月の風に磨いたように冷たく光っていた。

疲れて眠たくなっていたので、休んで行きたい気持なり。勝手口を開けてみると、錆びた鑪話のかんからがゴロゴロ散らかっていて、座敷の畳が泥で汚れていた。昼間の空家は淋しいものだ。薄い人の影があそこにもここにもたえずんでいるようで、寒さがしみじみとこたえて来る。どこへ行こうと云うあてもないのだ。二円ではどうにもならない。はばかりから出て来ると、荒れ果てた縁側のそばへ狐のような目をした犬がじっと見ていた。

「何でもないんだ、何でもありませんよ」

言いきかせるつもりで、私は縁側の上へ屹とつたって

いた。
(どうしようかなア……、どうにもならないじゃないの
ッ！)

夜。

新宿の旭町の木賃宿へ泊った。石壁の下雪だけで、道が館のようにこねこねしている通りの旅人宿に、一泊三十銭で私は泥のような体を横たえることが出来た。三畳の部屋に豆ランプのついた、まるで明治時代にあってありはしないような部屋の中に、明日の日の約束されていない私は、私を捨てた島の男へ、たよりにもならない長い手紙を書いてみた。

みんな嘘っぱちばかりの世界だった

甲州行きの終列車が頭の上を走ってゆく

百貨店の屋上のように寥々とした全生活を振り捨てて

私は木賃宿の蒲団に静脈を延ばしている

列車にフンサイされた死骸を

私は他人のように抱きしめてみた

真夜中に煤けた障子を明けると

こんなところにも空があつて月がおどけていた。

みなさまさよならー

私は歪んだサイコロになってまた逆もどり

ここは木賃宿の屋根裏です

私は堆積された旅愁をつかんで

飄々と風に吹かれていた。

夜中になつても人が何時までもそうぞうしく出はいりをしてゐる。

「済みませんが……」

そういつて、ガタガタの障子をあけて、不意に銀杏返しに結つた女が、乱暴に私の薄い蒲団にもぐり込んで来た。

すぐそのあとから、大きい足音がすると、帽子もかぶらない薄汚れた男が、細めに障子をあけて声をかけた。

「オイー お前、おきろー」

やがて、女が一言一言何かつぶやきながら、廊下へ出て行くと、パチンと頬を殴る音が続けざまに聞えていたが、やがてまた外は無気味な、汚水のような寞々とした静かさになった。女の乱して行つた部屋の空氣が、仲々しずまらない。

「今まで何をしていたのだ！ 原籍は、どこへ行く、年は、両親は……」

薄汚れた男が、また私の部屋へ這入つて来て、鉛筆を嘗めながら、私の枕元に立っているのだ。

「お前はあの女と知合いか？」

「いいえ、不意にはいつて来たんですよ」

クヌウト・ハムスンだつて、こんな行きがかりは持たなかつただろう——。刑事が出て行くと、私は伸び伸びと手足をのばして枕の下に入れてある財布にさわつてみた。残金は一円六十五錢也。月が風に吹かれてゐるようで、歪ん

だ高い窓から色々な光の虹が私には見えてくる。——ビエロは高いところから飛び降りる事は上手だけれど、飛び上つて見せる芸当は容易じゃない、だが何とかなるだろう、食えないと云うことはないだろう……。

(十二月×日)

朝、青梅街道の入口の飯屋へ行つた。熱いお茶を呑んでいると、ドロドロに汚れた労働者が駈け込むように這入つて来て、

「姉さん！ 十錢で何か食わしてくんないかな、十錢玉一つきりしかないんだ」

大声で云つて正直に立っている。すると、十五六の小娘が、

「御飯に肉豆腐でいいですか」と云つた。

労働者は急にニコニコしてバンコへ腰をかけた。

大きな飯丼。葱と小間切れの肉豆腐。濁つた味噌汁。これだけが十錢玉一つの栄養食だ。労働者は天真に大口あけて飯を頬ばっている。涙ぐましい風景だつた。天井の壁には、一食十錢よりと書いてあるのに、十錢玉一つきりのこの労働者は、すなおに大声で念を押しているのだ。私は涙ぐましい気持だつた。御飯の盛りが私のより多いような気がしたけれども、あれで足りるかしらとも思う。その労働者はいたって朗らかだつた。私の前には、御飯にこつた煮にお新香が運ばれてきた。まことに貧しき山海の珍味であ

る。合計十二錢也を払って、のれんを出ると、どうもありがとうと女中さんが云ってくれる。お茶をたらふく吞んで朝のあいさつを交わして、十二錢なのだ。どんづまりの世界は、光明と紙一重で、ほんとに朗らかだと思う。だけれど、あの四十近い労働者の事を思うと、これは又、十錢玉一ツで、失望、どんぞこ、墜落との紙一重なのではないだろうか――。

お母さんだけでも東京へ来てくれれば、何とかどうにか働きようもあるのだけれど……沈むだけ沈んでチンポツしてしまった私は難破船のようなものだ。飛沫がかかるどころではない、ザンブザンブ潮水を吞んで、結局私も昨夜の淫売婦と、そう変った考えも持っていやしない。あの女は三十すぎていたかも知れない。私がもしも男だったら、あのまま一直線にあの夜の女に溺れてしまつて、今朝はもう二人で死ぬる話でもしていたかもしれない。屋から荷物を宿屋にあずけて、神田の職業紹介所に行つてみる。

どこへ行っても砂原のように寥々とした思いをするので、私は胸がつまつた。

(お前さんに使ってもらうんじゃないよ)

おたんちゃん――

ひよつとこ――

馬鹿野郎！

何と冷たい、コウマンチキな女達なのだろう――。

桃色の吸取紙のようなカードを、紹介所の受付の女に渡すと、

「月給三十円位ですつて……」

受付女史はこうつぶやくと、私の顔を見て、せせら笑っているのだ。

「女中じゃいけないの……事務員なんて、女学校出がうろうろしているんだから駄目よ、女中なら沢山あつてよ」

後から後から美しい女の群れが雪崩れて来ている。まことにごもつともさまざまなことです。

少しも得るところなし。

紹介状は、墨汁会社と、ガソリン罐と、伊太利大使館の女中との三つだった。私のふところには、もう九十錢あまりしかないのだ。夕方宿へ帰ると、芸人達が、植木鉢みたいに鏡の前に並んで、鼠色の白粉を顔へ塗りたくっている。

「昨夜は二分しか売れなかった」

「戴睨みじゃア買手がねえやー」

「ヘン、これだっていいって人があるんだから……」

「ハイ御苦労様なことですよ」

十四五の娘同士のはなしなり。

(十二月×日)

こみあげてくる波のような哀しみ、まるで狂人になるよ